

---

# 東方天想夢 ~ Desire Sky.

六鈴丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方天想夢 ↗ Desire Sky .

### 【NZコード】

NZ8301D

### 【作者名】

六鈴丸

### 【あらすじ】

幻想郷に住む博麗神社の巫女、博麗靈夢。靈夢他はスペルカードによつて起きた異変を解決していく。異変によつては調査に向かう主人公が違つたり。異変中に他の会話もあつたりします。

## 第壹月 ～子初月～

「今夜は星が綺麗ね。」

私は神社の境内から星を眺めていた。その圧倒的な数に、星一つ  
一つが弾幕にも見える。

そして大きく光り輝いている月は我々人間に強く刺激を与えてく  
る。それ故あまり夜空を見る事はないのだが。

星といえば、少々デジャヴがあるな。

「靈夢～？そんなところで何やつてんだ？」

そう、こいつだ。弾幕はパワーとか言つが、普通の魔法使いらし  
く、まあ妖怪退治に喜んで出かけるとか普通の人間とはいがたい  
ところもある。

そして私の昔からの友人でよく神社に来てくれる。それはいいん  
だが、竊盗の悪癖があるから人の物を勝手に盗んでいかないでくれ  
と願いしたい。

「夜空を見ていたのよ。いつも以上より綺麗だし、明日は晴れるか  
もね。」

「うん、そうだな。なんなら明日パツとパーティでもするか？」

「別に明日何があるわけでもないし、昨日も今日も一昨日もそのま  
た前の日も毎日宴会だったからどうせ明日も宴会でしょう。」

私も随分と懐かれたものだ。吸血鬼、亡靈や天狗、西瓜とか大量に来て毎回宴会するし。

「はは、なんだつたら大きな異変でも起きないかねえ。  
「ばか、平和が一番よ。」

まったく、縁起の悪いことを言ひ。」の人は疲労といつ言葉を知らないのか。

「うーん、まあ最近はそう言ひ予感がしないしな。と、私はもう帰るぜ。また明日。」

「ちょっと待ちなさい。人の御札や本、マジックアイテムとか萃香を勝手に持つていかない。」

「分かつてゐるぜ。でも萃香は無理があるぜ。」

そう言つて魔理沙は魔法使いらしく、ホウキに乗つて空を飛んでいった。見えなくなるまで見送つた後、私はため息をついてまた夜空を見上げる。相変わらず月は強く妖力を放つてゐる。

「・・・本当に何も起きないといいんだけどね。」

私たちの住んでゐる幻想郷は、東の国の辺境の地に存在するとさ

れている。

「ここには妖怪などの人外のものが多く住んでいるが、僅かながら人間も住んでいる。

幻想郷は強力な結界によつて幻想郷外部と遮断されているため、外部から幻想郷の存在を確認することはできず、幻想郷内に入ることもできない。

同様に幻想郷内部からも外部の様子を確認することはできず、幻想郷から外へ出ることはできない。

そのため、幻想郷では外の世界とは異なる独自の文明が妖怪たちによつて築き上げられている。

なお、幻想郷は結界で隔離されてはいるものの、異次元や別世界といったものではなく、幻想郷も外の世界も同じ空間に存在する陸続きの世界である。

「あの時の吸血鬼異変から、私たちは大きく変わったわ。」

吸血鬼異変。

幻想郷に出現した吸血鬼が幻想郷の支配を目論んで起こした紛争である。吸血鬼は強い力を持つていたため、多くの妖怪が吸血鬼の部下となつたが、最終的には強い力をもつた妖怪によつて鎮圧された・・・。

この事件がきっかけとなり、スペルカードルールという決闘ルー

ルが制定された。

「スペルカードルール・・・。幻想郷内での揉め事や紛争を解決するための手段とされており、人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールのことね。」

対決の際には自分の得意技を記した「スペルカード」と呼ばれるお札を一定枚数所持しておき、すべての攻撃が相手に攻略された場合負け。

また、カード使用の際には「カード宣言」が必要とされるため、不意打ちによる攻撃は出来ないとされる。

しかし、人間や妖怪はこのカードを利用して、様々な異変を起こした。異変が起きたときはいつも博麗神社に住んでいる博麗 靈夢、または普通の魔法使いの霧雨 魔理沙が調査に向かい、犯人を見つけて懲らしめるという流れが基本である。

そのような流れの中、人間と妖怪の住む幻想世界。それが幻想郷だ。

## 第弐月～四候操異変～

幻想郷の今の季節は春。美しい花や桜が咲き乱れる季節。そう、春のはずなのだ・・・！

「あ、暑いっ！…」何でも晴天すぎるでしょ！？」

太陽の光がじりじりと照りつけてくる。それはもう影が出来ないくらいに。まるで真夏だ。だが周りは春の花の良い香りがする。なぜか夏の花も混じっているが。

「季節的におかしい…。あの夜空はこれの前兆だったのかしい。」

眩しい灼熱の熱線により汗がどんどん出でてくる・・・。燃え尽きそうだ。

「あら、大変なことになつてゐみたいね。これじゃあ氷の妖精も脳が溶けちゃつわね。」

「紫…。」

くすくす笑いながら境界から紫が現れた。その涼しい顔からして、ずっと境界の中で寝てたに違いない。それに比べ私はとても苦しい顔をしている。

「そんなとこりにずっといると口射病になるわよ。早く境内にまいりなさい。」

「あなたは境界操れていいわねえ…。」

紫の言葉に甘えて境内へ入ったわけだが…。  
なぜか急に寒気がした。

「・・・雪? と、雨。」

「こんなに日が照っているのに急に雨と雪が降り始めた。見渡すと春夏秋冬の花が咲いているし、紅葉してる葉もあって桜も花びらを散らせてる。」

「やつぱりおかしいわね。また誰かの仕業かしら。前にも似たようなことがあったけど、今回は幽々子じやなさそうだしねえ。」

流石に陽気にしていた紫も、顔を顰める。

前に似たよつなこととせ、春雪異変のことだ。

春の季節になつたにもかかわらず、いつまでも冬のように雪が降り続けた異変である。しかし今回は少し違つ。四季も天氣も、滅茶苦茶である。

「・・・ちよつと暑くて寒くで、風邪引きたつだけだと調査するべきかしら?」

「待ちなさい。少し休んでからにした方がいいと思つわ。日光に長時間当たつすわよ。」

長時間寝すぎの紫に言われてもあまり説得力は無いが。  
でも私のことを心配してくれてるみたいだから休むとするか。

「あ、暑いんだぜ！」

「うひ、叫ぶと余計暑くなるわよ。うひ、寒い。」

一方、魔法の森。ここに住んでいる魔理沙とアリスも異変を感じていた。いくら願望していた魔理沙でも、四季や天候が滅茶苦茶では流石に怒り狂っている。

「こんなムカつく現象初めてだぜ。まったくビリのビリつが起こしやがったんだ？」

そのビリのビリつか分からぬのにアリスに怒りをぶつけても仕方が無い。しかし、焼き尽くされそうなくらいの暑さと凍え死にしそうなくらいの寒さ。アリスの方も苛立ちが湧いてきているのが分かる。

「あまりここでいると風邪を引くわね。一旦中へ入りましょう。今回は靈夢が何とかしてくれるだろうし。」

「チツ、また靈夢か。悔しいぜ。」

文句を呴いている魔理沙を、アリスが無理矢理引っ張つて中へ入らせた。

「靈夢、紫。今回は頼んだわよ。」

「咲夜。」

「はい。またおかしな現象が起きましたね。四季天候が滅茶苦茶です。」

「これは少し困るわね。まともに生活することが出来ない。」

紅魔館では咲夜が光によつて照りつけられている空を眺めていた。レミリアは椅子に腰掛け、紅茶を啜つてゐる。紅茶を皿の上に乗せて、語り出した。

「蒼空に舞つ天の獅子王が暴れているわ。誰も止めることの出来ないほどにね。しかし止められるのはあの少女。もう私たちの『運命』は彼女にしか委ねられてないの。私たちはこつやつて無事を祈るしかできない。いくら『運命』を操れる私でも、指をくわえて見ていいことしか出来ないのよ。」

「は、はあ。」

その時レミリアは椅子から立ち上がった。ゆっくり扉の方へ近づいていく。

「おつと、客が来たわね。この世界の『運命』は生か、死か。一人による一つの選択によつて全てが決まつてしまつ。間違えてしまえば即刻、死…。」

「なかなか深いことを言っていますが…。彼女は

「間違つた選択なんてしませんよ。」

それを聞いたレミリアはふつ、と微笑む。

「よく言つたわ、咲夜。それじゃあ私は彼女を信じる」とするわ。

「

「あつ 。 雪だ。」

「桜がこんなに咲き乱れているのに、雪、ねえ。」

白玉楼にいる妖夢と幽々子は満開の桜を見ていた。周囲にいた幽靈もこの現象に驚き困惑している。

「幽々子様、これは……。」

「うーん、『四候操異変』と名付ければ良いのかしらね。誰かによつて引き起こされた、四季天候が荒れ狂つた異変…という感じね。」

「これじゃあ落ち着いて花見できませんねえ… 幽々子様?」

「それでもないわよ。色んな季節の食べ物が獲れるようになるし、ありがたいわ。」

妖夢は呆れたようにため息をつく。

「少しほは食べ物のことばかり考えていないので、幻想郷の心配して下さこよ~。」

「つふふ、冗談よ。」

幽々子は口に扇子を当て、軽く笑い出した。

「まつたく…。あら？密が来たみたいですよ。」

「ん、本当ね。」

二人は一いつ丸に向かってきたいる方へ駆け寄つていつた。

## 第参月 ～御転婆妖怪『丸玖』～

「犯人が何処にいるか大体分かつたわ。」

何か心当たりでもあるか、紫が突然そんなことを言い出す。

「へえ、どこなのかしら?」

「『竜の巣』よ。天に渦巻いている大きな雲。まあここからじゃ見えないからかなり高いところにあるけどね。」

それを聞いた靈夢は啞然とする。当たり前だらう。高いところまで行かなければならぬし、入るだけでも危険である。紫はそんなこと気にしてないようだ。

だがしかし、何故すぐに場所特定が出来たのだろうか…？

それは一応場所が分かつたんだから置いておいて、道のりは結構険しい。なぜなら妖怪の山を登らないといけないからだ。

妖怪の山に住んでいる天狗や河童などの多くの妖怪たちは、山に入り込もうとするものを追い返そうとする。わざわざ頂まで登らないといけない為、途中で見つかると色々面倒なことになってしまふ。うーん、その時は射命丸に頼るしかないかも知れない。

「大丈夫よ。邪魔するものは弾幕で排除しなさい。」

「分かつてゐるわ。何とかしてでも懲らしめないと。」

強い日差しと冷たい風の中、靈夢と紫は竜の巣へ向かった。

「待てーーそこの一二人！」

霧の湖を通り過ぎようとしたとき私たちを呼び止めたのはチルノだつた。

「あら、チルノじゃないの。こんな異常事態の時にここにいるなんて本当にバカかしら？」

「バカっていうなー。お前達こそ何やつてるんだ？」

「言わすとも見れば分かることを聞いてくる白体頭が弱いのだろう。ここに来ることなんて滅多にないのに。」

「こつものじよ。貴方と話をしている暇なんて無いの。邪魔をするなら速攻で片付けるわよ？撃つと動く！」

最後に魔理沙のセリフを混ぜて私は退くよつて忠告した。

「邪魔した覚えは無いわ。あと打つと動くって、野球か？だったらやろーよ。」

「こつはあるで状況が読めてないよつだ。その後さすがの紫も苛立ついたらしく、妖回針を放つてあつけなく懲らしめてしまった。南無。

「ちゅうとひどくねー」

「さあ靈夢、こんな氷の妖精無視して先へ行きましょ。」

「うーん、そうね。」

あまりのチルノの無様さに、苦笑いをする。

「むむ、何奴だ！」

門番の紅美鈴が紅魔館へ訪れた妖怪に向かつて叫ぶ。

「あなたは門番の・・・中国だつたかしら？いや、ほんまりん？み  
つりん？」

「紅美鈴だ！ホンメイリン！覚えておけ！で、ここまでなんのよう  
かしら？」

美鈴は呼び名に対しても怒りながら、田的を訪ねる。

「幻想郷を彷徨つていたらここまで来てしまったの。というわけで  
休ませてくれないかしら？」

「断る。ここはホテルじゃねーんだぞ！」

即答した美鈴だが、彼女が幻想郷を巡礼できるほど大きな力を持  
つていてるということを見抜いていた。さらに彼女の服装は巫女っぽ  
い装束。あくまで巫女っぽいが多少靈夢に似ている姿形をしていた。  
紅霧異変の時に酷い目にあつたトラウマがぼんやりと蘇つてくる。

紅霧異変とは、レミリアが起こした幻想郷が紅い霧で覆われて

しまつた異変のことである。

当時靈夢や魔理沙が紅魔館に来て色々暴れ回った。（美鈴から見た感じで）

「それは残念ね。だつたらスペルカード発動させてもうりつわ。」

「え、ちょ、ちょっと待つ！」

次の瞬間大量の弾幕が降り注ぐ。美鈴の意識はここで途絶えてしまつた。

## 第肆月 ～幻想郷巡礼者～

「客が紅魔館に入ってきたみたいですね。まったく、美鈴は何やつてるんだか。」

咲夜が大量にナイフを用意している。多分全部美鈴お仕置き用。

「彼女は必ずここへ来るわ。それも、『運命』。もちろん美鈴が警備を疎かにしたのも、『運命』ね。」

「お嬢様、前者は頷けますが後者はハッキリ言つて違うと思います。」

「

そして、白玉楼でも客が一人。人間のようだ。

「ここが白玉楼…。」

「私がその白玉楼の主人、西行寺 幽々子よ。」

ぬつと幽々子が出てきたため、彼女は驚いて尻餅をついてしまった。

「幽々子様っ！出会い頭に脅かしちゃ駄目ですよー。」

「ふふふ、ごめんなさいね。大丈夫かしら？」

彼女を見ると、妖夢と同じくらいの少女だった。紫のよつな珍しい服装をしている。

「だ、大丈夫…。でも尻が……。」

かなり驚いたんだろう。立つのには時間がかかりそうだ。

「本当にすまないな。主人がこんなもので。しかしこんな時に何故ここに?名は?」

彼女ははやっと立てれるようになつた。

「朱鳥 能理子よ。ちょっと前に神隠しで幻想郷に来ちゃって、それで巡礼してたんだけど……。」

幽々子、妖夢は苦笑いをする。

(八雲 紫のことかー!)

(犯人は八雲 紫。)

「しかし、ここは桜が綺麗で良いところだな。よし今日はここ近くで休むことにするわ。いいかしら?」

「無理に決まっているだろう、幽々子様?」

「いや、ちゅうと待つて。」

幽々子が能理子に近づく。コクリ、と能理子は唾を飲む。

「おいしく食べ物をもつてるかしら。そしたら考えてあげる。」

ズテツ

妖夢が滑つて転ぶ。

「ゆ、幽々子様～」

「おじしこものならあるわよ。わたくしで買つた焼き鳥。」

「ミステイアねー少し出かかるわ妖夢ー」

幽々子は目を光らせて森の中へと入つていった。

その後誰かの悲鳴声が聞こえてきたよつな氣がする…。

「くつ・・・・・くしゅんー！」

「あら靈夢。風邪でもひいたのかしぃ。」

私と紫。初称「結界組」はゆっくり妖怪の山の頂へと向かつていた。

「わよ、ちよっと冷気に当たられただけよ。たいしたことませー。  
くわしかーー！」

「くしゃみばっかりしてると妖怪に見つかるわよ。  
好きでやつてるわけじゃないのー。」

竜の巣に近づくほど異変は酷くなる。まるで嵐のよつだ。しかし普段寝てばかりいる妖怪が、風邪をひかないのは何故なのだろうか。

「でも、本当に見つかつたりした!…。」

「ふふ、くしゃみばかりしてる変な奴がいると思えば…。」

目の前に天狗の妖怪が現れた。

「他所から来た人間と妖怪だったか。」

「ほら見なさい。くしゃみするからこいつなるのよ。」

「あんたねえ…。」

私は頭に怒りマークがついたが、今は喧嘩をしてくる場合ではない。

「痛い目にあいたくなれば、即刻立ち去ることね。」

「この異変を止めるには頂に登らないといけないの。通してくれるかしら?」

「わざわざ妖怪の山を使わなくていいんじゃないの?」

確かに、正論だ。だが妖怪の山でないと条件が揃わないのだ。

「妖怪の山じゃないといけないの。山と言えばここだし、射命丸も

いるしね。」

「そういうこと。」

「だが、ここで通せば天狗としてのプライドが……。」

「うーん、これ以上言つても無駄みたいよ？力づくでも通してもらいうしかないみたい。」

「残念だわ。私の名は 笹凧 鈴。私は射命丸とは違う。天狗の力、とくと思い知りなさい。」

「ゆつくりしていってね！」

そして、この異変が起つて初めてのスペルカードの戦いが始まることとなつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8301d/>

東方天想夢 ~ Desire Sky.

2010年10月9日13時46分発行